

# 【ねがいましては】

平成11年9月28日

第118号

KYOWA SCHOOL

## 「家族の持つ意義」

もう30年余り前になると思いますが、私の育ったところである、東京の中央区は「佃」という町の祭りの時の出来事です。威勢良く神輿がかつがれているときのことです。40歳を越えたであろう一人の男性が、きっと父なのでしょう、背負って神輿に近づいてきました。おそらく70歳は越えていたと思います。老いた父をなんとか神輿に触らせてやろうと、必死になって神輿に近づく、その姿は、私にはどのようなテレビの感動ドラマよりも、鮮烈な感動として映りました。

まわりでかつていた、若い衆たちもそれに気がつき、「とつあん・・こっちこい！」威勢のいい声が、その父子を自然と受け入れていました。

「ウリヤ！ウリヤ！」父と子がその群れの中に溶け込んだとき、まわりから拍手が起きました。

私たちが、常に持ちつづけなければならない「心」が、目の当たりにされ、そのときは、ただ、深い感動で言葉にならなかったものが、今、このような、子供達を目の前にして生活する環境に置かれ、「伝えるべきものは・・？」と問いかげられたとき、この父と子のつながりこそ、先頭にあるべきではないかと思います。

父は子に、何を教え、子は父から何を学び、この人間社会の「回転」を色づけて行くべきなのか。関係は父と子でなくとも、そのつながりの基本は、母と子、先生と生徒のいずれかの関係でも、大きく変わるものではないと思います。

子供達はいつも、あるひとつの矛盾と向かい合っています。しかもそれに気がついているようで、そうでない。というような、とても曖昧としたものです。おそらくお母さん方もお気づきではないと思います。いつもお母さんたちは、人には優しくしなさい。譲ってあげなさい。教えてあげなさい。などと、おもいやりの言葉をなげかけます。こどもは、なるほど優しくすることは、とても気持ちのよいことだ。と認識します。それはそれであたりまえのことなのですが、こと、「成績」となると、「うちの子だけは！・・」という感情が母の中に、外には出なくても、心の内、もしくはわが子へと注がれたりします。この時こどもは、わからなくなります。

この矛盾は、実は実社会へとそのままつながります。うちの人だけは、リストラに遭わないようにならないように（運動会で）、などとつい思ってしまうこの今の時代、「よくやったー！おまえがビリ取ったから、まわりの子がみんなうれしそうだったぞ。」なんてほめ言葉が、そこいらじゅうに漂っていたら、いいですよねー！

そんな父をもった子は、きっと30～40年後、「おやじ！神輿さわらしてやっからな！」なんて一言あるんじゃないでしょうか。

## 10月の予定

珠算科・・そろばんDEギネスがはじまります。君はどのジャンルで活躍しますか？

いま、自分がもっている力の限界にチャレンジしてください。

学習科・・中学では、中間テストが近づいてきました。自分との戦いがこれからを大きく左右します。中間終了後、計画授業がはじまります。第1弾・・10月23日（土）

「電流」自由参加制です。（学年問わず）きつつい！